

データをどう読み込ませるかから考える、実務実装の論点

生成 AI の普及によって、多くの人がまず経験したのは、チャット画面に問いを入力し、返ってきた文章を読んだり、そのまま下書きに使ったりする使い方でした。これは現在でも十分に有効な活用法ですが、実務において AI の価値をさらに引き出そうとすると、単発の対話だけでは限界が見えてきます。理由は明快で、現実の仕事は一回の質問で完結しないからです。日々の業務には、昨日のやり残し、今日の予定、進行中の案件、今月の目標、過去の判断履歴など、複数の情報が重なり合っています。今回の勉強会で示されていたのは、まさにその複雑さに対して、AI を「一問一答の相手」ではなく、「複数の情報を束ねながら行動提案を行う存在」として位置づける発想でした。

この視点から見ると、AI エージェントの本質は「賢い AI」そのものではなく、「どの情報を、どの順序で、どの目的のために扱わせるか」を設計することにあります。勉強会の中でも、日々の記録、Google カレンダー、案件データベース、月ごとの目標といった複数のデータを組み合わせ、今日何を優先すべきかを整理する実践例が紹介されていました。ここで重要なのは、AI のモデル性能だけではなく、入力構造そのものです。どれほど高性能な AI を使っても、参照すべき情報が曖昧であれば出力は不安定になります。逆に、必要なデータが適切に整理され、目的に応じて限定的に読み込まれていれば、AI はかなり実務的な補助者になります。

この「限定的に読み込ませる」という考え方は、今回の勉強会の中でも繰り返し強調されていた重要なポイントです。説明では、AI に何でもかんでも任せるのではなく、「この記録」「このカレンダー」「この案件情報」といった形で、必要な範囲を指定することが大事だと語られていました。これは単なるテクニックではありません。AI に対して入力範囲を明示することは、出力の精度を上げるためであると同時に、情報の過剰取得を防ぐための統治でもあります。AI が扱う情報量が増えるほど、利便性と引き換えに、意図しない参照やノイズの混入、さらには情報管理上の不安も大きくなります。したがって、AI 活用の成熟とは、「たくさんのデータを渡せる状態」ではなく、「必要なデータだけを扱わせる状態」に近いと言えます。

実務で AI エージェントを活かすうえでは、もう一つ重要な論点があります。それは、AI に何を考えさせるのかではなく、何を判断材料として持たせるのかという視点です。たとえば、今日の To Do を提案させるのであれば、単に「今日やることを考えて」と聞くよりも、昨日の記録、カレンダー、進行中案件、月間目標のように、行動判断に必要な文脈を与えたほうが、AI はずっと実用的な提案を返します。これは、AI が賢くなったというより、人間側が判断の構造を外部化したと言うべきです。つまり、AI エージェント設計とは、AI の使い方の問題である以前に、自分たちが仕事をどう構造化しているかの問題でもあります。

今回の勉強会では、個人のタスク管理だけでなく、メールや問い合わせ対応のような業務にも話が広がっていました。特に興味深かったのは、AI を返信文の自動生成にそのまま使うというより、問い合わせ内容や対応状況を共有し、誰がどのように対応したかを追跡できるようにする話が出ていたことです。ここから見えてくるのは、AI 活用が単なる文章生成の時短ではなく、情報の流れそのものをどう整えるかというテーマに踏み込んでいることです。実務では、一人だけが AI をうまく使えることより、チーム全体で「何が起きているか」を見通せることの方が重要な場面が少なくありません。その意味で、AI 導入は個人の能力拡張であると同時に、組織の情報設計の問題でもあります。

この流れの中で、セキュリティやリテラシーの論点が自然に立ち上がっていたことも、今回の大きな価値でした。勉強会では、AI がすべてのデータを自動的に読みに行くのではなく、必要な情報を意図的に選んで与えることが大事だと共有されていました。これは、実務において極めて重要な視点です。なぜなら、AI が扱える情報の範囲を曖昧にしたまま利便性だけを追うと、気づかぬうちに機微情報や本来参照すべきでない情報まで処理対象に含めてしまうおそれがあるからです。AI の安全な運用には、高度な技術知識より先に、「この情報は渡してよいのか」「この範囲は共有してよいのか」を判断する基準が必要です。つまり、AI リテラシーとは、モデル名や最新機能を知っていることではなく、情報の境界を理解し、扱い方を選べることだと考えられます。

参加者からの質問として、「仕事で使う中で、AI が読みに行けない情報があり、そこで挫折しがちだ」という趣旨の問いが出ていた点も印象的でした。それに対して、PDF 化して読み込ませる、画面キャプチャを使うといった工夫が共有されています。このやり取りは、一見すると小さな実務テクニックに見えますが、実は重要な示唆を含んでいます。AI 活用は、理想的な連携環境がすべて整っていなければ始められないわけではありません。むしろ、完全な自動連携が難しい現場ほど、PDF 化や画面キャプチャのような“地味だが確実な方法”が有効になります。ここで大切なのは、AI 導入をオール・オア・ナッシングで考えないことです。完璧なシステム連携がなくても、適切な形式に変換して読み込ませることで、十分に実務支援の価値を生み出せる場合があります。

さらに、この工夫は単なる代替策ではありません。読み込ませる前に PDF 化やキャプチャを挟むという行為は、人間が「何を AI に渡すのか」を一度選別する工程にもなります。つまり、完全自動化ができないことは不便である一方で、情報の取捨選択を人間が意識する契機にもなりえます。AI 時代の業務設計では、すべてを自動化することだけが正解ではありません。むしろ、どこを人間が選び、どこを AI に任せるのか、その境界を適切に設計することの方が重要です。今回共有されたような読み込みの工夫は、その意味で、技術的な補助策であると同時に、情報統治の実践でもあります。

今回の学びをより本質的に捉えるなら、AI エージェントの活用とは、ツールの使い方を覚えること以上に、仕事をどう捉え直すかというテーマだと言えます。日々の行動提案、予定管理、案件管理、問い合わせ対応、組織内の共有、セキュリティやリテラシー。これらは一見別々の話題に見えますが、実際にはすべて「必要な情報をどう整理し、どう流し、どう判断するか」という一つの問題につながっています。AI を入れることで仕事が楽になる、という理解は入り口としては正しいものの、そこにとどまると本質を見落とします。AI が入ることで、人間側には逆に、データの構造化、役割分担、判断基準の明確化といった設計責任が強く求められるようになります。

この意味で、今回の勉強会が示していたのは、AI エージェントの「すごさ」ではなく、AI 活用が問う「設計力」そのものでした。どのツールを使うかも重要ですが、それ以上に、どのデータをどう扱わせるかを考えられることが重要です。そしてその背景には、セキュリティやリテラシーに対する感度、共有文化への理解、個人と組織の境界を見分ける感覚が必要になります。AI 導入が進むほど、ツール選定の巧拙よりも、こうした設計思想の有無が成果を分けるようになるでしょう。今回の内容は、そのことを非常に具体的に感じさせるものでした。

最後に強調しておきたいのは、AI 活用の成熟とは、派手な自動化ではなく、必要な情報を適切に読み込ませ、過不足ない形で活かすことにあるという点です。今回紹介された実践例は、まさにその原則に基づいていました。だからこそ、読者にとってこの学びが有益なのは、特定ツールの使い方を真似できるからではなく、自分の仕事において「何を AI に渡すべきか」「何を渡すべきでないか」を考える視点を得られるからです。AI は、正しく設計されれば有力な補助者になります。しかし、その前提となるのは、道具の新しさではなく、情報をどう扱うかという人間側の成熟です。今回の勉強会は、その入口として非常に示唆に富む内容でした。

※ご注意ください

本資料は、Creative Guild で開催した勉強会の内容をもとに、AI（ChatGPT）を活用して自動生成されたものです。内容の正確性や完全性については保証できない点をご理解ください。ご自身の判断や追加の調査とあわせてご利用いただければ幸いです。Creative Guild は本資料の内容に対する責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。